

教会とロータリー

——デービス前会長に学ぶ——

石皿 平澤清一郎

東京国際大会に、連日欠かさず出席した。デービス会長の閉会の短い言葉は、最も感銘深いもので、大要次の如き趣旨であったように思う。

「東洋には釈尊という聖人がおり、その教典の中で慈悲のこころを説き、悩める人々を救った。西洋にはキリストと称する聖者がおつて、その聖書の中で博愛の精神を説き博め、多くの心貧しき人達を救済した。釈尊の慈悲とキリス

トの博愛とは、互に相通じることがあつた。今日、我々のロータリーの職業奉仕、社会奉仕、そして世界社会にたいする奉仕の活動も、慈悲のこころや博愛の精神にささえられてこそ、洋の東西を問わず、民族のいかに拘らず、思想宗教の相違を超えて、全世界の人類に、高くかつ正当に評価されているのではあるまいか」と。ロータリアンとして二年余の新米である。週一回の例会に出席すること、「友」誌を購読することの二つは、すべてのロータリアンに課せられた最少限度の必要条件であると、信じて疑わなかつた。

そんな素朴な初歩的概念で、自己満足してよ

いものだろうか。外面的な事柄は別として、ロータリーとは一体何なのか。もつと深いところに、何か潜んでいるのではあるまいか、というもどかしさがいつもつきまとつていた。入門書を読んでも、難解な綱領や定款を検討してみても、それはそれなりの意義があつたが、この疑問に的確に答えてくれるものではなかつた。

だが、会長の結びの言葉は、測らずも模索しつづけてきた疑問をまともにとらえ、ロータリーの奉仕活動が、その始祖釈尊のこころ、キリストの精神にささえられてこそ、人類に正當に高く評価されてきたのだ、と喝破された。光明に照らされた如き、強烈な啓示であつた。

四年前ピッツバーグでプレスビテリアン教会に連れられて行ったことがある。パイプオルガンが奏され、四名の歌手が讃美歌を歌いはじめた。司祭が前に出て、いろいろの儀式行事が終ると、説教がはじまつた。聖なる神の御声が、迷える小羊たちを導き諭すような、それについて威厳にみちた流暢な大演説であつた。アーメンのためいきが、あちこちにもれた。一同の讃美歌の合唱があり、廻つて来る銀盆の上に喜捨を投じる。教会は、神に祈り神に念ずる、聖なる雰囲気ひたる場であつた。

ロータリーの例会は、点鐘ではじまり、国歌

やロータリーソングの斉唱のあと、会長のあいさつ、幹事の報告、ゲストやメンバーの卓話、職業奉仕や社会奉仕の計画を樹て、その具体化の方法が論ぜられる。食事をともにしながら、和氣藹々の裡に、友愛を深め懇談を交わす。すべて奉仕の理想を鼓吹し育成することにつながるものであつた。会場監督がニコニコボックスを持って廻り、会長の点鐘があつて会を閉じる。ロータリークラブは、奉仕と称する善なる行為を語り合い、実施し、善なる行為を持ち出すことにより、自らを切磋し琢磨する場であつた。

かくて教会も、ロータリーも、同工異曲の形式と規律である。一はクリスチャン、他はロータリアンの相違あるのみ。私は思う。教会は宗教的信仰を司るところ、ロータリーは道徳的行為を扱うところであると。

人間の理想意欲が内面的に燃えあがるのが感情であり、神仏を祈り信ずる聖なる宗教の世界が成立する。同じ人間の理想意欲が外界に向つて行動となるとき理性となり、善を行ぜんとする道徳の世界を形成する。宗教と道徳とは、同根から発する二つの異なる枝である。とすれば、教会もロータリーも、まぎれもなくルーツを同じうする親戚同士ではあるまいか。即ち地域社会においても人類世界においても、教会とロータリーは手を携え各々の分野を守りつつ共存共栄の関係に在る、と言えるのではあるまいか。

デービス会長の言葉の意味を演繹して、ロータリーが教会に精神的支柱を求めるとすれば、教会はロータリーに実践的な行動を期待するものである。